

文學博士 齋藤清衛 著

精神美
としての
日本文學

人 文 書 院

精神美としての日本文學

特別行爲税共

昭和三十三年十月十五日印刷
昭和三十三年十二月二十日發行
昭和三十三年十一月十日再版



著者 齋藤清衛

著者

渡邊久吉

東京市中央区
通町一丁目
ル下二

兼發行
人刷印

河北印刷工業所

東京都中央区
南土町一丁目
八〇一

所刷印

發行所

京都市河原町二條下ル
振發
東京
大阪
京都
神戶
名古屋
福岡
札幌
仙台
旭川
釧路
青森
岩手
秋田
山形
宮城
福島
茨城
栃木
群馬
埼玉
千葉
東京
神奈川
新潟
富山
石川
福井
山梨
長野
岐阜
愛知
三重
滋賀
京都
大阪
兵庫
奈良
和歌山
徳島
香川
高松
愛媛
高知
福岡
佐賀
大分
熊本
鹿兒島
那覇

人文書院

序

およそ、傳統日本の文學が、けふほど多大な關心を國民全般の上に投げかけたことが、かつてあつたであらうか。それも萬葉や源氏やといふ類の古典の敎書にかゝはる概念的の知識がたゞに要求されてゐる程度でなく、實に、國民文學の傳統精神が民族自覺の對象としてつよく新に要請されて來たのである。

およそ、文藝ほど、一民族一社會の精神生活を全面的に、宛ら、明鏡のごとく後世に傳へることす文化の形式はその類比がない。宗教・道德・法律、何れとしてこの點に於ては文藝に三舍を避けねばならぬだらう。祖先のたましひをそのまゝに反映してゐる意味に於て、傳統文學こそ子々孫々に對し心の糧を絡えず供給する秘庫と云ふことも出來るのである。

さて傳統日本文學が、大和民族のニキミタマを表象してきたことは、茲に

本居大人の論を援用するまでもなからう。が、もともと現世的であり、はた徑行的であるわが國民の性格は、血統的にアラミタマの要素を濃く藏してゐることは否めない。即ち、問題は、この荒魂がいかに和魂と相並んで民族の精神を生かし育てたか云ふ歴史に係つてゐる。余は、かの印度宗教がこの日本島にのみ純熟の地を求めたことや、支那の倫理思想がこの大和島根にのみその正統を傳へてゐる文化史的の意義やを、またその中に認めんとするものであるが、傳統文藝に就ても、ひそかに和魂の美學を樹てんとするは、あまりにも無謀の企であらうか。

余は、本書の序論と結論とに於て、かゝる考察に俟つ文學精神の研究方法を陳べて見た。次に、本論の諸篇は過去三四年の間に隨時公表してきたもので、全體としては完全な統一と組織とを持つてはゐないが、さりとて、追究すべきものは盡くこれを追究し、論すべき問題は一通り本書に於て觸れて來

たつもりである。敢て書名を「精神美としての日本文學」と名づけた所以は、かゝる文藝精神を措いて、特に傳統獨自の美はないといふ余の確信に基いてゐる。しかも、余は些かその内容の非現代的にすぎる點を悞れないではないが、さりて日本文學の當爲や理想やは、絶對的にかゝる遺産を無視して考へられぬことを信ずるものである。この意味に、直接、古典文學に興味を持つものゝ否との別なく、わが同胞が盡くおのおのものを瞳を一たびこの課題の上にそゝがれんことを國民の一人として切望してやまざるものである。

昭和十三年九月、支那事變のまなかにあたり

武藏野の假寓にて之をしるす

著

者

目次

序論

日本文學精神史の方法論

三

古典文學研究に於る立脚點

二七

日本文學精神美の諸問題

國民的文學

元

「味」と「老」

四二

大隱

六二

哀傷

八三

自然美

101

日本的批評

113

中世文學の精神研究

中世文學の定位

113

幽玄美の深化

114

性格的破産

116

態度的なもの

117

流離漂泊

119

俳諧美の本質

127

藝味

128

俳狂

129

「利口」と「うらうへ」

二七三

太田道灌

二八三

説話文學と藝道觀

二九五

神皇正統記の文學的價值

三三五

結

論

日本文學研究の對象領域を擴大せよ

三三五

序

論

日本文學精神史の方法論

茲にいふ日本文學精神史といふのは、もちろん、日本文學の精神史を對象とする學の謂である。精神史と云ふ言葉は、思潮史といふ言葉に置換へても甚しい支障はないのだけれど、一には思潮といふ語の意味内容が思想史にのみ偏解される惧あり、二にはわが文學精神には思辯性が薄弱で直觀的全靈的の傾向が多いといふ意味合から、姑くこの「精神史」といふ語を使用することにしたものである。なほ、文學精神史の學は、ドイツの文藝學では重要な部門として基礎づけられてゐるが、精神史の泰斗ディルタイの學說の如きは、特に多分の影響をわが學界にも遺してゐるやうである。但し、日本精神といふ語が無制限に使用され、文學精神史といふ言葉の使用法も區々であつて、ディルタイ派の用語に准ずると否とは別問題とするも、果して、どの程度までそれが學的檢討を経てゐるかは、可なりに疑問とすべき點のやうに思ふ。

云ふまでもなく、一國民の精神體驗の跡を學的に合則づけるといふことは容易の事業ではない。從來、これらを學の對象として、時には解剖分析し、時には敢て普遍妥當化に出ることを以て、學者の身勝手の冒瀆

的傲慢だとさへ非難されたが、いかなる事實をもこれを學の對象とするに假借しないといふことは、學徒の持つ嚴肅な使命でなければならぬ。信仰の對象としてのみの神と、學の對象規定をうけた神の概念とは、假令、その見方の窮極に於て合致するかもしれないけれど、そこに到るまでの手續には著しい懸隔が介在すべきである。日本の文學精神もこの意味に於て、精神科學の對象として、その研究が方法論的に研究されるといふことは當然欣ぶべき傾向だと云はねばならぬ。

さて、明治以降の日本文藝學（文學の科學の意味に使ふ）が半ば江戸時代の國學の文獻學的態度を承繼したものであつたことは云ふまでもないが、學の使命はその結果として、その發生や變遷やに對する考證的、溯源的研究に偏して、現象的研究、更に批評的研究態度の乏しかつたことは、その免れぬ非難とすべきであらう。もちろん國學精神には、上代精神復古の要求は明瞭であつたが、それは文學精神の理想を直接に指摘したものではなかつたのである。少くとも語句の訓話註釋に偏し、事實の史的考證に専らであつたその研究態度は、次の二方面の立場から修正さるべき缺陷を持つてゐた。

その第一は、「文學精神そのものの歴史的研究」第二は「文學の本質をなす形態的樣式の釋明」——この兩者は、主觀的態度と、客觀的態度、心理學的方法を主とするものと美學的方法を主とするものと、また、文學の「作家」を中心にするものと、「作品」を中心にするものと云ふ様に互に對立する要素を持つてゐるが、時空兩元の關係にひとしく、動的歴史的なるものと、靜的形態的なるものとは、研究の中樞に於ては完全に

交叉すべきものであり、相倚り相助けて文藝學の完成の爲に資すべき性質のものであらう。特に、後者の樣式的研究は、目下極めて幼稚の状態にあるのみならず、日本文學の様式は、後述する如く歐米文學史上の様式に比較するとその姿相の明瞭を缺くものが少くない。更に、樣式史の研究にあつては、文學精神史の研究を参照すべき點が殊更に多く、精神史はやはり、日本文藝學の重大な要素をなしてゐることを拒むことが出来ないのである。

ところで、文學精神史に隣接する精神史學で、屢々自ら文學精神史の如く假裝するものが少くない。その第一は、民族的國民的精神史である。ウ・リンゲルの「民族心理」などを引合に擧げるまでもなく、一民族精神とその文學精神とは密接な交渉を持つてゐるに相違ないけれど、民族精神を統一づけてゐるものは、そのまゝ文學精神の中心と一致しうる性質のものではない。特に、國學者系統の日本民族史の研究は、官學としての當時の儒學者が大陸精神を盲目的に崇拜するに對し、敢て、大陸文化渡來前の上代的文獻を根據として大和民族の特性を基礎づけようとしたもので、古代嘆美の態度に偏してゐると共に、現存在に對する客觀的認識を缺くものが少くない。従つて、後世を末代と呼び、文明的のものを否定する態度に出たものがその中には極めて多かつた。國民精神が、他の思想の影響を被り分裂解體の危機に遭遇した際に、政治的に傳統的民族精神を宣揚することは最もその策のよろしきを得たものであるが、それを以て文學精神の全面を蔽ひ盡しがたいことは更めて云ふまでもなからう。なほ、近來、著しく進歩した民族學の研究は文學精神との間に

ある提携と一致とを示してゐるが、それは、國學風の民族主義學者が文獻的研究の埒外に一歩も出る勇氣のなかつたに對し、文獻以外に民間に傳承されてゐる言語・風俗・傳説・歌謡等を資料として、新しい研究の分野を開拓しつゝあるものである。従つて、民族學研究も、文學精神の領域に踏入の場合が屬々生ずるけれど、直ちに文學精神の眞髓を説明しえないと云ふことは、一般民族精神學の場合と同一であると云はねばならぬ。

第二は、文化史研究と文學精神史との交渉であるけれど、この兩者の關係も甚だしく密接である。もし、文學を以て、文化形態の一部門とする見方に従へば、文學精神史は當然文化史の中に籠められてよい性質のものであるけれど、一般文化史の敘述は、なほよく、文學獨自な精神史をその中に含めしめることを困難としてゐると云はねばならぬ。假令、ディルタイ派の云ふ如く文化の諸形態は、これを孤立的に見ず、聯關的統一的に把ふべき性質のものであるとしても、文學が文學として、文化に寄與する獨自性はこれを輕視することを許されてない。即ち、文化史學は、文化の歴史學でよい筈であるけれど、文學精神史學は、歴史の文學にまでそれを昂揚すべき使命を持つ。和辻哲郎氏の「日本精神史の研究」津田左右吉氏の「文學に現れたる國民思想の研究」等の名著は、日本文學研究の上に忘れたい功獻を遺しはしたけれど、それらは何れも嚴密な意味に日本文學精神史でありえなかつたことをここにも思はねばならぬ。

第三は、社會風俗史研究と日本文學精神史との關係である。文學はつねに文化諸現象に對する最もよき具

體的表象となりうるために、社會風俗史が文學作品を好箇の研究資料とすることは屢々見られて來た事實であつた。もちろん、風俗を風俗として考證的に解説する範圍では、文學精神史との混淆を惹起する如き惧はない譯であるけれど、ナドラーがドイツ文學研究に用ひたやうに、環境的勢力を重視することから、やがて物質的興件を以て精神を規定して行かうとする理論が誘導されるに到る。即ち從來、文學史類の内容として多く見られてきた時代概觀の内容の如きも、屢々社會風俗的記述のみで埋めつくされてゐるものが多い。例へば、近世文學の研究家が近世の世相史に通曉することは望まらるべきことであるが、文學精神史の敘述が世相といふやうなものを中心にする時、かの社會主義的文學論の陥つたそれとひとしい過失を招かないでもない。近世の文學精神はその内容が甚しく複雑であるがために、從來ともその組織的統一的の精神史研究の成果を得難くしてゐるのは、やはり、小説史に於ては世態風俗との關係を重視し、國學史に於ては民族主義を過重視するといふその結果、全面的にそれが把握されることを妨げたに依るものかと思はれるのである。

更に、日本文學精神史の正確な對象を見透すためには、明治以來のその學史の跡を顧ることが大切である。即ち、文學精神史の研究態度の如きも、觀念美學の時代・藝術學的時代・文藝學的時代と云ふ三期に亘つての歴史を辿つてゐることが判る。主として明治時代に屬するその第一期は、作品の文獻學的研究か、さなくば作者の傳記考證學的研究の時代に屬して居り、たまに、文學精神史に觸れた研究があつても、その根柢は、所謂審美學的態度のもので、觀念的美學を應用したものが甚しく目についた。その間に、文化に於

る藝術の位相が闡明されると共に、わが文學史研究にも、文學の具象性などを特に心理的に見る研究法が起り、和歌や俳諧やは歌人俳人の制作體驗から特に研究が深められ、小説や戯曲類やも、藝術學的研究が加へられ、更に日記、隨筆、評論の類までが各この文學的意義を闡明されるに到つた。この精神史の研究は、途中、文獻的書史的研究流行の嵐に遭遇せしめられたが、大正時代から昭和時代の始めにかけて逐時その功を重ねてきたことが顧みられる。例へば、上代より近世に至り文學美を素樸・物のあはれ・幽玄・さび・をかしみといふ體系を以て把へようとする行き方などは、全くこの時代の研究態度を代表するものと云つてもよからう。しかし、それは多く、歴史の中に存するものを組織づけたといふのみで、純批評的、哲學的の考察は殆どその中に求められなかつたと云つてもよい。換言すれば、史的實在と個人の精神生活との交はるところに沿うて引かれる如き線がその中になのである。かくて、日本文學の精神科學的研究がこの數年來要請されるに到つた事情なども考へられるのであるが、遺憾ながら未だその成果としては見るべきものが乏しい。これは、わが國に、歴史科學や分析的心理學やの發達してゐないといふ方法上の理由も與つてゐるのであるが、一には、日本の文學精神史に、獨自の性格があるためであつて、例へば、ウンゲルやグンドルフやドイツ文學に對して用ひた方法を、そのまゝにわれに適用出來ないといふ如き點も併せ考へられなければならぬ。今、概して、日本の文學精神史の特色を歐米諸國のものに比すると、先づ日本には、かのエヤマンティンゲルのあげてゐる文藝學の一法則である極性の法則が稀薄であるといふことが云へるだらう。易經にも、益・夬